

植 物 雑 記

奥 原 弘 人

H. Okuhara : Miscellaneirsis Notes on Plants

植物の形態を調べるには図鑑を中心として諸文献をひもとくわけであるが、それでもその総てを知ることの出来ない場合もある。昨年もそのような経験をしたので、それについて記してみる。

スイカズラ科の木本ニワトコによく似ていてクサニワトコの別名もあるソクスについて、白馬村の篠崎益雄氏と共に白馬村や戸隠村でその形態や生態について観察した。ソクスは民家や田畑の付近に小群をつくっている。この状態からみて、ソクスは中国原産で、薬用として栽培されるようになったとの記載は理解出来る。ソクスについて興味をもてるのは、その花序である。径20cmほどの散房状集散花序をなして多数の小花がつく。花冠は白色で径3~4mm, 所々に黄色の腺体と名のつくものがつく。腺体は中央がへこんで杯状をなし径4mmくらいで光沢がある。この形は奥山春季著の「原色日本野外植物図譜」によく描かれていて、これを蜜腺としている。

ソクスは花が終ると径4mmほどの果実を結び、諸文献には赤く熟すとある。ところが白馬村で観察したのは、だいたい色をおびた黄色であった。この科のニワトコの果実も赤く熟すのが普通であるが、中には黄熟するものもあってキミニワトコの品名もある。それに習えばこれもキミニワトコとして品名を与えてよいようである。ところで前にあげた黄色の腺体についての記載は簡単で、その行く末についての記載はどの文献にも見当たらないが、私共の見た腺体は果実が熟す頃まで残り、大体同じ大きさで緑色に変わっていた。葉はその頃も濃緑色で活動しているようであった。

この腺体なるものについて文献を調べてみた。「岩波生物学辞典」によれば、腺体とは多細胞腺のことであり、多細胞腺は腺細胞集団からなる外分泌腺で9種類に分類されるとあるが、その中でソクスの腺体は最も単純な形のものであるとみることが出来る。

また蜜腺について同書には多くは子房の基部または子房と雄ずいとの間にあって環状または盤状の形態をとるとあるが、サクラなどでは葉柄に花外蜜腺としてついているのは一般に知られていることである。これに対しソクスの腺体は花外蜜腺の一つで花序の内部において独立した大きな腺体をつくっているものと解してよいであろうか。ソクスはやや一般的でないが諸彦ので所見を承りたい。

昨年10月、明科でミョウガに赤い花が咲いたとの情報が入った。時は花が終って葉も変色する頃であったから現物を見ることとした。なるほど地面に近く上に向かって真赤な口を開いているのを見た。そしてこれは果実が熟して裂開し、果皮の内面が現れているものと分かった。果皮は3裂し、その各々の概形はふくらみをもった2等辺3角形で、中央に球形で径4mmほどのものが2~3個、あたかも小鳥の巣の中の卵のように並んでいる。これは白色の仮種皮をかぶった果実であると文献にある。これを一般の人が花とみるのは当然かも知れない。そこで私は大町市でかなり広いミョウガ畑で9月頃盛に花を開いているのを見ていたので行ってみたが、果実は1個も見当たらなかった。このことを白馬村の篠崎氏に連絡すると、間もなく白馬村にも少しあったとのこと、また同氏の知人からは上田市にも20個くらい見つかったとの返事があったという。

何れにしてもこのような事が話題になったということは文献にもあるように、稀なことであるからであろう。では何故昨年何ヶ所かで果実が出来たのであろうか。私の知り得たのは3ヶ所であるが、このほかでも結果があったのであろう。天候のせいであろうか。今後とも注意してみたい。

一般にミョウガは若い花序が食用にされる。これをミョウガの子とか花とか呼んで店頭にも並ぶ。これを分解してみると、大きな薄い苞があって、これを取り去ると蕾が現れる。これを繰り返すと苞は次第に小さくなるが10枚ほどあり、蕾も10個くらいあることになる。

花についての記載は各文献に載っていて、奥山図譜には図示されており、平凡社図鑑には同科のハナショウガの花が図示されている。この科はラン科に近く位置しているので花形もラン科に似ている。

ミョウガは中国原産とあって、古く渡来したものらしいが、学名は *Z. mioga* とある。時々山中で見ることもあるが群生しているが、人里近い所であって逸出したものと考えられる。ミョウガを食すと物忘れするとか勉強が出来ないとかの説もある。若しそれが真実であるならば、それはその成分によるものであろうが、北隆館の「資源植物事典」には香氣その他の成分についての研究はなされていないとある。